ニュース専修 ウェブ版

2007年3月号

[10面]

ネットワーク情報学部・栗芝プロジェクト

千代田カードプロジェクト ― 「丸の内を紹介」東京マラソンで配布

▲配布を終えたメンバーたち（日比谷公園で）

ネットワーク情報学部の栗芝正臣講師指導の「千代田カードプロジェクト」（千代田区研究支援事業「千代田学」＝第427号 既報）のメンバーが 2月18日、東京マラソンの10キロゴール地点・日比谷公園で行われた「東京 大マラソン祭り」で、研究成果「Marunouchi Pocket Information」を配布した。当日はあいにくの雨だったが、61枚ひと組のカード1000セットを配布し、約70人からアンケートの回答を得た。

「QRコードを利用して街にある歴史や文化などの『見えない情報』をカードとウェブサイトで視覚化し、実際に歩いてもらおう」というプロジェクトから卒業制作に移行し、メンバーは6人に減ったが、少数精鋭で乗り切った。公的な研究費を使って研究することで、緊張感と責任感を持って取り組むように意識が変化したという。

「オフィス街に史跡もあり、新しいものと古いものが融合した街＝丸の内」を研究地域に設定し、自分たちで写真を撮影。100字以内で説明をまとめ、「まなぶ・あそぶ・たべる」といったアイコンをつけて、使い勝手の良いつくりを目指した。代表の大河ひろみさんは、「良いものを作ろうという共通の目標に向かって議論しながら進めてきました。カードを手に実際に『丸の内』を歩き、時代の移り変わりを感じていただければうれしい」と期待を話す。

栗芝講師は「2年間で『モノ』になる面白さと、クオリティーを上げる難しさを体感したと思う。配布したことで、NTT東日本および丸の内の開発を進める三菱地所からもカード利用の打診があった。研究は次のプロジェクトが引き継ぎ、『産官学連携』で続けていく。ビジネスとして自立出来るようになれば、卒業生たちの良い記念になる」と話している。カードは千代田区の「さくら祭り」（3／23～4／1）でも販売する。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年3月号

[10面]

専修社会学会大会

力作の3卒業論文発表

▲左から加藤さん、武重さん、矢崎さん

2006年度専修社会学会大会が1月31日、生田キャンパスで約150人が参加して開かれ、総会のあと文学部人文学科社会学専攻4年次生で卒業論文において優秀な成績を収めた3人が発表した。

柴田弘捷会長の挨拶などのあと3学生が登壇。

加藤博美さん（秋吉美都ゼミ）は「なぜ医療現場で逸脱行為がおこるのか～A歯科医院での観察を通して～」をテーマに発表。歯科助手のアルバイト中に体験した医療逸脱行為について、関係者の聞きとりを中心に調査した結果を基に、厳しい立場にある歯科医療現場の問題点を突いた。

武重寛幸さん（今野裕昭ゼミ）のテーマは「地域社会における商店街―商店街衰退防止を目指して」。停滞著しい商店街の現状を、先進事例の調査、インタビューを交え“防止”へのポイントを考察。大手商業資本店との共存、行政や地域住民の協力の必要性などを挙げた。

最後の矢崎慶太郎さん（嶋根克己ゼミ）は「インターネットのリアリティ―人間の排除と人格形成―」をテーマにした。コミュニケーションとはなにか、人格はいかにして形成されるかをマスメディア、特にインターネットのコミュニティ・サイトの観察の中で考察。さらにN・ルーマンの『社会システム理論』を読破し問題点に迫った。

それぞれの発表に対し修士課程の高田大輔さん、山本絵里子さん、横山順一さんが講評。会場を埋めた後輩学生との議論も活発だった。矢崎さんは「準備不足だったが、研究を振り返る貴重な経験になった」と話した。

専修社会学会は、18年前に発足。社会学専攻の教員、学生とで構成され、講演会、機関誌発行などの事業を展開。研究の活性化や相互交流を担う。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年3月号

[10面]

ネットワーク情報学部

学生が実現した…展示会の軌跡を1冊に ― 「ボクらのコウサ展ものがたり」出版

ネットワーク情報学部の1期生有志が「学生だけの力で学外展示会を」と奔走し、2年前に開いた「第1回コウサ展」に参加、翌年第2回の実行委員を務めた5人の4年次生が企画・執筆した『学生が実現した展示会―ボクらのコウサ展ものがたり』(以下「コウサ本」)がこのほど出版された。専修大学出版企画委員会が06年度から始めた「学生の活動を学生自身が編集する企画」の第一弾に選ばれたものだ。

第2回の企画を進める中で「周囲の理解が得られず、モチベーションが下がった時期もあった」という苦労や葛藤を乗り越え「行動を起こし、やり通せば必ず理解してもらえる」ことを体感した5人は、「夢を持ち続け、まず行動してみること。迷うより、一歩を踏み出そう」というメッセージをこの本にこめた。

「コウサ本」は、「コウサ展」実行委員だけでなく、出展者側の思いや成果物の紹介、先輩・後輩へのインタビューを、「ボクらの目線で」語るというユニークなつくり。「コウサ展」がどのように始まり、どう受け継がれてきたか、そこに託された思いなどがつづられ、付録として学部紹介ガイド、展示会を開きたい人向けの会場ガイドや展示会ノウハウも掲載されている。

それぞれが「プロジェクト」で共同作業を経験していたが、今回の経験では別の「大切なもの」を得たと語る。

読みやすさを意識したというデザイン統括の尾崎仁美さんは「一人で作業を抱えて行き詰まったとき、仲間に『してほしいこと』を的確に伝えることが大切だと気づいた」。[redacted]原久恵さんは「同じ文章でも他の人が読むと異なった意見が出てくることが新鮮だった」。山本洋さんは「自信を持って発言する仲間から、『プロジェクト』とは違う刺激を受け、自分の足りない部分に気づいた」という。

取材から得たものもある。卒業生や教員の取材を担当した平戸由美さんは「忙しい日常の中でも『夢』を持ち続けている先輩たちはスゴいと思った。そういった生き方にあこがれた」。高須賀悠さんは「本に貫かれている『目標を持って生きる大切さ』は、自分へのメッセージになった」と話してくれた。

学生たちを温かく見守った山下清美教授は「本の制作自体も大仕事だったが、彼らの『あきらめず、最後までやり遂げることで、何かが変わる』という経験は、幅広い世代の方々の共感を呼ぶと思う」と話している。

※本体1500円＋税。オフィシャルサイトは http://s3.ne.senshu-u.ac.jp/~kousa_story/ 問い合わせは専大出版局へ。電話 03(3263)4230

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版

2007年3月号

[10面]

「コウサ展」19作品を展示

第3回「コウサ展」が2月3、4の両日、東京お台場の日本科学未来館で開催され、多くの来場者でにぎわった。

出展は個人制作から授業課題、プロジェクトや卒業制作まで19作品。まとめ役の田代祐輔さん(3年次)は「日ごろの研究成果を一般の人々に示し、交流することは意義深い」と話している。

ドイツのマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクからの特別聴講生ショーン・ヴェントさんは「ツリー構造によるタグ・システムの提案」を展示＝写真。「専大での研究は、とても有意義でした。成果はまだ途上。3月に帰国するが、落ち着いたら再来日したい」と意欲を見せている。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年3月号

[10面]

川崎市多摩区の「防火パレード」に協力

多摩区安全・安心まちづくり推進協議会と多摩消防署（川崎市）が、3月4日に向ケ丘遊園駅周辺の商店街で行った防火パレードに、陸上競技部員が協力した＝写真。

1日消防署長に委嘱された高橋良輔（経済4）、湯野隆太朗（経営4）、赤木淳一（商4）、木下卓己（商2）の4選手が、オープンカーや消防団車両に分乗し、区民に「火の用心」を呼びかけた。

パレード終了後、多摩区役所で、災害社会学を専門とする大矢根淳文学部教授が「地域における『自主』防災とは」を講演。区民ら約180人が聴講した。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年3月号

[10面]

≪専修人の新しい本≫

排出する都市 パリ — 泥・ごみ・汚臭と疫病の時代

高橋 清徳訳（A・フランクラン著）

人間は排出する存在である。この人間が高密度に居住する都市は大量の排出物を出す。そこで、どの都市でもその処理システムが大きな問題となる。しかし、そのようなシステムが存在しない時代があった。そんな時代、都市はどんな状態だっただろうか。中世のパリでは人々は生活ごみ・屎尿・糞便など「すべてを道に」捨て、放置した。その結果、都市は非衛生で悪臭に満ち、ペストなどの疫病が蔓延した。本書はその実態をリアルに描き出している。類書が少ない都市環境史の一冊。同時に、そのような現実と格闘した環境行政の歴史でもある。（悠書館・本体2200円＋税）

訳者（たかはし・きよのり）＝法学部教授。主な担当は西洋法制史、ゼミ（地球環境）。

運動イメージと自律神経

大石 和男著

運動イメージは、一般にはスポーツ選手のトレーニング手段としての役割ばかりが注目されてきたが、実際には脳科学の研究で重要な役割を果たしてきた。これからはリハビリなど医療分野へ応用されることが期待されている。そのために、自律反応などの基礎データの積み重ねが欠かせない。

本書は、著者らが発表してきた論文や未発表のデータを最新の脳研究の文献を引用してまとめたもの。最近は脳研究にMRIなどの大掛かりな機器が不可欠と考えられているが、そのような装置なしでも、工夫と地道な研究の積み重ねにより、国際的に評価される質の高い研究ができることを示した点でも評価できる。関連分野の研究者、指導者や学生にも薦めたい一冊である。（専大出版局・本体2400円＋税）

著者（おおいし・かずお）＝商学部教授。担当は健康科学論。

少年の刑事責任 年齢と刑事責任能力の視点から

渡邊 一弘著

本書は、日独の少年刑事法制についての立法史研究を基礎に、刑法と少年法との関係について、刑事責任論からの体系的位置づけを試みたものである。本書では、刑罰適応性評価の観点から、刑法における刑事未成年制度と少年法の基本理念である保護主義とを連続的に理解し、刑事未成年制度の理論構造、触法少年を司法的な保護処分に付するための正当化原理、犯罪少年の刑事責任評価の構造などの問題について、体系的な理解が試みられている。（専大出版局・本体3800円＋税）

著者（わたなべ・かずひろ）＝法学部兼任講師・大学院任期制助手。平18院法博。※平成18年度課程博士論文刊行助成による。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.